

【論文】

戦時中の日本語の実際 形容詞・形容動詞・副詞を中心に

遠藤 織枝

Japanese Adjectives, Adjectival verbs and Adverbs
during the Wartime

ENDO, Orié

要旨：戦時中の家庭雑誌『家の光』のグラビアと、戦時中のドラマ台本に基づいて、当時の日本語を検証している。今回は当時の日本語の中でも、形容詞・形容動詞・副詞に焦点を当てて、戦時中のそれらの語群が、現代語と比較したときどのような部分に差があるのか、あるいはどのような部分に差がないのかを考察する。また、戦時中に多く使われた漢字「国」「聖」「戦」について、それぞれの熟語を拾い出して、その特徴を分析する。

その結果、戦時中の形容動詞には古語の「タリ」活用「ナリ」活用の語が比較的多く残っていること、オノマトベも多く見られたが、それらはすべて、現在の辞書にも収録されているものであることがわかった。

「国・聖・戦」のつく熟語の中には、現在では辞書にも収録されなくなっているものが多く、まさに戦時色の濃い語群であることがわかった。

キーワード：オノマトベ・タリ活用形容動詞・ナリ活用形容動詞・戦時中の新語・現代語史

1. はじめに

佐藤喜代治（1975）は「言語は一つの社会的事実であり、社会的秩序である。[……] 従来の国語史の研究は国語変化の事実を跡づけることにす

くれた業績をあげてきたが、社会の歴史、文化の歴史の中で、言語の歴史がどういう地位を占め、社会・文化とどんなかかわりをもつかが究明されていない。それは、いわば人間不在の歴史である」(p73)という(〔……〕は引用文中の省略箇所を示す。以下同じ)このような批判に答えるものとして、安田敏朗は1990年代以降、社会と日本語の関係について精力的に、かつ精緻に論じて新しい分野を確立している。しかしながら、安田の研究は、枠組みとしての日本語の社会での有りようの研究であって、個々の語が社会変化の中で、どのような社会の影響を受け、それが日本語話者の使用言語にどう変化を及ぼしているのかといった、個々の日本語と社会との関係の論考ではない。遠藤は、社会とことばの有りようを、昭和初期の言語資料に基づいて研究し、いくつかの論考を報告している。遠藤(2006a)では戦時中の敬語を、遠藤(2006b)では戦時中の家庭雑誌の描く女性像を、遠藤(2007a)では戦時中の外来語を、また遠藤(2007b)では戦時中の語彙を現代語への移行過程でとらえて、それぞれの知見を報告してきた。昭和史の中で、具体的な言語現象を把握し、それが現代語にどのように影響を及ぼしているかを明らかにしたいと考えてきた。

柴田武(1975)は「国語学には現代史はないわけですね」(p83)と発言し、明治時代の日本語の研究以降の史的研究の欠如を指摘しているが、その発言から30年を経た現在、昭和初期の語に日本語史の中での地位を与えるべき時期を迎えていると言えよう。ここで、遠藤は一連の研究を仮に現代語史の一環として位置づけたいと考えている。

2. 現代語史研究の意義

現代語を研究したり、日本語教育の場で現代語を教育しようとするとき、少し前の時代のことばと、現代語との差異の把握が重要となることがある。辞書を調べても、その差異は書かれていないことが多い。

たとえば人が夜就寝の際に身を横たえる家具を「寝台」と言うか「ベッ

ド」と言うかである。『明鏡国語辞典』（以下『明鏡』）には以下のように記述される。

しんだい【寝台】(名) 寝るときに使用する台。ねだい。ベッド。「 - 車 […………]」

ベッド(名)[bed] 寝台。ねどこ。「 - シーン […………]」

また、『広辞苑 第6版』（以下『広辞苑』）には、次のように書かれている。

しん-だい【寝台】寝るために用いる台。べつど。

ベッド【bed】寝台。ねだい。ねどこ。「ダブル- 」

これをみた日本語学習者は、「わたしの部屋にはベッドと机があります」という代わりに「わたしの部屋には寝台と机があります」というかもしれない。辞書の語釈では「ベッド」も「寝台」も語として同時期に存在し、全く同じものを指し示していることになる。

しかしながら、この家具は、言語史の中でみていくと、昭和初期には「寝台」の語で表現され、現在は「ベッド」の語で表現されるという時間的隔たりによる用語の差が存在する。

さらに、近い過去には使われていたが、現在は使われなくなった語についても、辞書にはその情報は載せられていないことが多い。

たとえば、戦時中の雑誌『家の光』ではラッパの響きを伝える表現として「喇叭」の語が使われる。しかし、現在の新聞・雑誌で使われることはない。

『岩波国語辞典 第6版』（以下『岩波』）では次のように記される。

りゅうりょう【喇叭】(トタル)管楽器の音などが、すみわたっているさま。「たる喇叭の音」

『三省堂現代新国語辞典 第3版』（以下『三現国』）では、

りゅうりょう【喇叭】-たる(連体) -と(副)[文章語]管楽器の音がさえわたって聞こえるようす。「たるらっぱの音」

と記述されている。ここでは〔文章語〕と述べられることで、現在日常的に使われる語ではないことがわかる。しかし、『岩波』には、そのような情

報は載せられていないから、現在でも、一般に使われていると誤解されやすい。

古語的な語であっても、場合によっては現在でも使われることがある。たとえば、戦時中の家庭雑誌に使われている「縹渺」の語は、現代の会話で使われることはほとんどないし、新聞でも見られないが、普通のエッセーの中で出くわすことがある。

例1 この物語（夕顔の巻のこと、遠藤注）を読んでいると、しばしばふっと何か縹渺とした思いにいざなわれることがある
[……]（藤原克己2008「源氏物語の深さと美しさ」『図書』岩波書店2008年5月号p20）

のように、最近でも使われている。これらの語は、その語にふさわしい文体を選ばなくてはいけない。その種の情報が日本語学習者には提供されなくてはならない。

現代語も昭和初期からすでに80年を経ている現在、その時間的幅が言語の変化にも反映されてきている。ここに、現代日本語史を研究する意味も必要性も出てくる。柴田武のいう現代語史の研究が必要とされるゆえである。

3. 研究方法

本稿は、先に挙げた一連の遠藤の研究に続くもので、調査の対象は、昭和初期のラジオドラマ台本と、同じ時期の家庭雑誌のグラビアのそれぞれの日本語である。遠藤らは、昭和初期のラジオドラマ台本78冊を、当時の話し言葉に近いものとしてとらえて、そのことばを言語コーパスとして作成し、遠藤他（2004）として公開した。もう一方で、家庭雑誌『家の光』の戦時中1931年-1945年のグラビアのことばをコーパスとして電子化資料化して語彙や語法の実態を検索分析しながら考察を行っている。

本稿では、『家の光』コーパス中の戦争関連の記事3936文（以下このコー

パスを「家」と略記)と、遠藤他(2004)のコーパス中の、戦時中に放送された23本の台本(「以下そのコーパスを「台本」と略記)を用いて、形容詞・形容動詞・副詞(本稿ではこれらの語彙をまとめて「形容語」とすることがある)の使用実態と、戦時中に特徴的な語彙について調べる。戦時中の語と現代語の語彙との意味や使用状況の関わりを知るために、現代語の資料として『日本語能力試験 出題基準【改訂版】第3刷』の約1万語の語彙(以下「1万語」と略記)の中の形容語とも随時比較を行う。この「1万語」は日本語学習者の能力試験合格のための基準となる語彙としての選定であるから、戦後の語彙の代表というわけではない。あくまでも、最近2000年代初頭の日常生活に必要な最低限の語彙の目安となるものとして援用していることを予め断っておく。

品詞の認定についても問題はあある。特に形容動詞については認定が論者により異なる。たとえば、「颯爽」の語は、『明鏡』では「(形動)」とされるが、『三現国』では、「-たる(連体)-と(副)」とされる。この処置は、本来「タリ」活用の古語の形容動詞で、「たら・たり・と・たり・たる・たれ・たれ」の活用の連用形「颯爽と」、連体形「颯爽たる」の活用形で用いられてきた語が、現代語では、「颯爽と」「颯爽たる」の形でしか使われなくなり、「颯爽たる」は連体用法のみなので連体詞とし、連用用法の「颯爽と」は副詞とするというもので、品詞がふたつに分かれたものである。『明鏡』のように形容動詞とすると、「颯爽と 颯爽たる」しか活用しない語と、「だろ・だっ・で・に・だ・な・なら」と活用する他の多くの形容動詞と全く異なる活用の語が、同じ品詞ということになり、現実と乖離した処理となる。そこで、本稿では、『三現国』が、より実際の現実的な判断で品詞認定を行っていると考えて、品詞の認定はこの辞書に依拠する。

以下、原資料は歴史仮名遣い・旧字体の漢字で書かれているが、本稿での表記は現代仮名遣い・新字体の漢字に改めている。また、引用については、「家」の場合は文末の()内に掲載雑誌の年と月を示し、「台本」の場合は文末の()内に本稿末に提示したドラマ題名の略語を記す。

4. 形容詞

4-1 戦時中の形容詞

ここでは「家」・「台本」の中で使われている形容詞をすべて抜きだす。この際「やむをえない・たまらない」など、『三現国』『明鏡』では連語とされる語も、形容詞的用法の語として形容詞の中に含めて数える。

「家」では「愛くるしい・明るい」など122語が、「台本」では「青い・潔い」など242語が採集できた。また、「1万語」では「青白い・あさましい」など210語の形容詞が採集できた。これらの語を、「家」・「台本」に属する語群から「1万語」に属するものを除くと、戦時中によく使われた語彙となり、逆に「1万語」から「家」・「台本」の語を除くと、それらは、戦後に一般的に使われる形容詞と考えることができる。

「家」・「台本」・「1万語」の3資料に共通する形容詞は以下の79語であった。

青い・赤い・明るい・浅い・暖かい・新しい・厚い・熱い・ありがたい・いい・+ 潔い・忙しい・痛い・+ 痛ましい・美しい・うまい・+ 恭しい・+ うれ若い・うれしい・おいしい・多い・大きい・+ 雄雄しい・幼い・固い・かわいい・厳しい・清い・+ きわまりない・暗い・苦しい・黒い・心強い・快い・さびしい・寒い・親しい・白い・清々しい・少ない・すごい・+ すさまじい・涼しい・すばらしい・鋭い・高い・たくましい・正しい・楽しい・頼もしい・小さい・近い・強い・尊い・遠い・ない・長い・なつかしい・+ 涙ぐましい・はかない・激しい・早い・広い・深い・ふさわしい・太い・古い・+ 間近い・待ち遠しい・難しい・珍しい・めでたい・+ 申し訳ない・もろい・やさしい・良い・若い・若々しい・悪い

この79語の中で、「1万語」の形容詞と共通しているものは現在でも一般に使われる語であり、共通しない語は、戦時中に特徴的な語だということになる。そこで、「1万語」と共通する語としない語を区別するために、共通しない語、つまり、「1万語」には含まれていない語に+の記号をつけた。+

の印のついた語は、以下の10語であった。

潔い・痛ましい・恭しい・うら若い・雄々しい・きわまりない・す
さまじい・涙ぐましい・間近い・申し訳ない(申し訳なし)

これらの語が現代語でないということではない。現代でも使われる語ではあるが、「青い・赤い」などほど、一般的ではないという語である。最近の新聞で「恭しい」を検索すると、極めて少数の例しか見あたらないが、その珍しい例は以下のようなものであった。

例2 冬のさなか、薄暗い室の中によきによきと伸びる独活を思うのはとても愉快なことですし、そうして育った真白(まっしろ)の独活が薄紙に包まれてうやうやしく店頭に並ぶのは感動的で、思わず見とれてしまいます。(朝日08.3.11夕)¹

この例の「恭しい」は、戦時中の語義とは大きく変わっている。戦時中の「家」では、

例3 二重橋前にいたり、恭しく宮城を拝したのち、靖国神社に詣で〔……〕(1940.4)

のように「うやまいつつしんで、礼儀正しいようす」(『三現国』)の意で使われている。例2の用法は、本来の語義を比喩的に使い、極めて軽い「うやうやし」さである。同じ語が70年を経て、重々しさを軽妙洒脱さに変えて、継承されていくのを目の当たりにすることができる。

¹ 朝日新聞インターネット版「聞蔵」による。

4-2戦時中形容詞の意味分布

以上の形容詞が意味的にどのような語が使われているかを概観するために、『分類語彙表 増補改訂版』(国立国語研究所編)の分類にあわせて分類することにした。「家」「台本」をまとめて戦時中の語とし、それと戦後の「1万語」の形容詞と対比する形にした。戦時中の語彙では、「家」・「台本」合わせて出現度数が2回以上の語49語について、「1万語」では84語を分

類した。(表1)

〔表1 形容詞の意味分類表〕

分類番号	1.33		1.50		3.11	3.12	3.13	3.14	3.15	3.16	3.18							
	3.33		3.50															
分類項目	生活		自然		類		存在		様相		力		作用		時間		形	
調査対象	家・ 台本	1万	家・ 台本	1万	家・ 台本	1万	家・ 台本	1万	家・ 台本	1万	家・ 台本	1万	家・ 台本	1万	家・ 台本	1万	家・ 台本	1万
出現語数	2	6	2	11	0	1	1	3	4	10	3	0	0	1	2	0	1	1
比率(%)	4.1	7.1	4.1	13.1	0.0	1.2	2.0	3.6	8.2	11.9	6.1	0.0	0.0	1.2	4.1	0.0	2.0	1.2

分類番号	3.19		3.30		3.34		3.35		3.36		3.37		3.51		3.52		3.57		計	
	量		心		行動		交わり		待遇		経済		物質		天地		生命			
調査対象	家・ 台本	1万	家・ 台本	1万	家・ 台本	1万	家・ 台本	1万	家・ 台本	1万	家・ 台本	1万	家・ 台本	1万	家・ 台本	1万	家・ 台本	1万	家・ 台本	1万
出現語数	4	8	18	27	5	8	0	1	2	3	1	0	0	3	1	1	2	0	48	84
比率(%)	8.2	9.5	36.7	32.1	12.2	9.5	0.0	1.2	4.1	3.6	2.0	0.0	0.0	3.6	2.0	1.2	4.1	0.0	99.9	100.0

この表から以下のことがわかる。

- 1、戦時中の語で最も多く使われていた形容詞は「心」に分類される語群である。
- 2、「1万語」でも「心」に分類される語が多いが、対象語彙中の比率では、「家」・「台本」の全体に占める割合の方が高い。「家」・「台本」の「心」に分類される語彙は「^{おそれ}畏い・かたじけない・^{かしこ}畏し」など上位者に対する敬意・感謝に関する語が多いのに対して、「1万語」の「心」に分類される語は「恋しい・憎らしい・ばからしい・悩ましい」など個人的な感情を表す語が多い。
- 3、「生命」の項目の語彙は「家」・「台本」の「生々しい・篤い」が相当するが、「1万語」にはこの項目に入る語彙はない。
- 4、「力」に分類される語彙も「家」・「台本」の戦時中のものだけである。この項目に属する戦時中の語彙としては「力強い・手荒い・すさまじい」の3語である。

これらから、今回調査対象とした戦時中の形容詞は、現代のそれと比べて、上下関係を重視し、力を誇示する形容詞が多いことがわかる。

4-3 それぞれの資料の特徴

「家」には、以下のような古語の形容詞が使われている。

例4 動かざること山のごとく疾きこと風のごとき我が艦隊を縦横に馳駆せしめ、(1944.12)

例5 君が代の万歳、皇威八紘にあまねきとき、この御慶事、上(かみ)三陛下の御満悦こそ〔……〕(1935.2)

例6 スマトラ 治安全し。(1942.10)

例4は「疾し」の、例5は「あまねし」のそれぞれ連体形で、例6は「全し」の終止形である。また、現代語の連体形で古語の活用の「き」が使われる語もある。

例7 寒さます / \ 厳しきおりから村の皆々様にはお元気にて〔……〕(1945.2-3)

例8 笛吹の清き流れに身も心も洗つて、〔……〕を高らかに朗唱する。(1939.7)

雑誌のグラビア記事として、古語や古語の活用形も文体の引き締めに使われている。「台本」では、「家」と同様、

例9 そしてこの猛くなつかしい副長を暫く霞ヶ浦から送り出さねばならない時が来た。(「御盾」)

のような古語形や、「きわまりない・神々しい・恭しい・かたじけない」のような改まった場面で使われる語もみられる。その一方では、

例10 年寄りが朝寝するのはあんまり見っともいものじゃない。(「五万円」)

のような俗語もかなり使われている。「えげつない・でかい・おっきい・こっぴどい・ひでえ・重てえ」のような俗語・訛語も使われ、また「メンコイ」のような方言も使われている。

「1万語」では「あつかましい・あらっばい・いやらしい・おもたい・くすぐったい・煙たい・しぶとい・ずうずうしい・すっぱい・そそっかしい・だらしない・ねむたい・のろい・みっともない」など話し言葉で使われる

語が多い。

以上のように、戦時中と戦後の形容詞は連続線上にありながらも、資料によっては古語的色彩を残しているものから、平易で通俗的な日常語まで、多様な様相が見られる。

5. 形容動詞と副詞

5-1 語種

「毅然」のような漢語の形容語は、先に述べたとおり『三現国』の品詞表示に従い現代語では副詞として数える。そのため、「毅然たる」の語形で使われていたものも、同じ語であるから同じ語としてカウントし、形容動詞・副詞を分けて考察する際は、副詞に含めて数えることにする。また「十分」のように、名詞・形容動詞・副詞と複数の品詞が辞書に記されるものは、形容動詞としても、副詞としてもカウントして、両方で数える。その結果「家」の形容動詞の異なり語数は264語、「台本」では407語であった。「1万語」の形容動詞の異なり語数は369語であった。これらの語をそれぞれ語種で分けて示す(表2)。なお「堂堂」「堂々」など表記が揺れているものがあるが、本稿では「々」を用いる「堂々」の表記に統一している。「々」の使用は略式ではあるが、原資料の表記の多くが、この記号を用いているからである。

[表2 形容動詞の語種分布]

	和語		漢語		外来語		混種語		計	
	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合
「1万語」	86	23.3%	26	71.3%	7	1.9%	13	3.5%	369	100.0
「家」	54	20.4	20	79.2	0	0.0	1	0.4	264	100.0
「台本」	94	23.1	29	73.2	1	0.2	14	3.4	407	99.9

漢語の比率が最も高いのは「家」で、全体のほぼ8割を占めている。その中

でよく使われる語、ここでは出現頻度5回以上の語は、以下の12語であった。

いっぱい・果敢・完全・元気・縦横・重要・精鋭・熱心・非常・猛烈・立派・歴史的

[台本] で5回以上出現した漢語の形容動詞には、

遺憾・偉大・一生懸命・いっぱい・簡単・急・きれい・結構・元気・ご苦労・残念・自然・失敬・失礼・重大・十分・相当・壮烈・大事・大丈夫・大切・大変・得意・のんき・馬鹿・非常・無事・不思議・変・本当・無数・無理・めった・優秀・有名・愉快・余計・立派

の38語があった。これらの語が漢語の比率を高めている。3つの資料の中で漢語の占める比率が低いのは「1万語」であった。このことは、戦時中に比べて戦後の漢語の比率が減っていることとも連動している。この「1万語」には、「家」・「台本」で出現頻度の高かった、「果敢・壮烈・遺憾・縦横・めった」などは含まれていない。「家」・「台本」によく使われる語で「1万語」にも含まれる語は、「偉大・いっぱい・きれい・結構・元気・残念・自然・重大・重要・相当・大事・大丈夫・大切・大変・得意・のんき・ばか・無数・無理・優秀・有名・愉快・余計・立派」である。

また、「1万語」には、「エレガント」「スマート」など外来語が7語含まれているが、これも戦時中と大きく異なる点である。なお、「台本」の外来語の1例は「スリリング」というもので、この語は、台本「石油」(1939.2.14放送)の中で、タイタニック号などが話題に上る豪華客船の中の少女の発話の中に使われている。戦時中でも、1939年のころはこのような外来語も自由に使えたという例として貴重な1語である。

次に接辞「的」の使用についてみると、「家」では「家庭的・画期的・決死的」など30語、「台本」は、[大々の・持続的・挑戦的] など33語、「1万語」では「消極的・静的・動的」など7語が採集できた。これらの中で、各資料に共通するものは、「家」と「台本」とでは、「大々の・徹底的・本格的・理想的」の4語が、また、「台本」と「1万語」では、「消極的・積極的・比較的」が共通していた。「家」・「台本」・「1万語」の3ジャンルに共通する

のは「積極的」であった。この語が、戦時中も今日もよく使われる語であることを物語っている。

5-2 副詞

3つの資料から副詞を取り出すと、「家」では235語、「台本」で612語、「1万語」で378語が採集できた。それを語種別に分けて示す。(表3)

〔表3 副詞の語種分布〕

	和語		漢語		外来語	混種語			
	数	比率	数	比率		数	比率	数	比率
「1万語」	277	73.3%	88	23.3%	0	13	3.4%	378	100.0
「家」	151	64.3	78	33.2	0	6	2.6	235	100.1
「台本」	474	77.5	122	19.9	0	16	2.6	612	100.0

形容動詞を考察した際漢語が多かったのに対して、副詞では和語の比率が圧倒的に高い。中でも「台本」での和語の使用がめだっている。「台本」は会話が中心だから、和語が多くなるのも頷ける。

頻度数でみると、「家」の和語で使用頻度の5以上のものは、次の8語である。

あまり・いたく・いよいよ・^{おそれお}畏くも・どっさり・なかなか・初めて・なにとぞ

漢語では、次の8語であった。

一斉・殷々・炎々・刻々・肅々・だんだん・断然・翩翩

「台本」では、頻度の高い語が多いので、30回以上のものを選ぶと、和語では次の23語が高頻度の語であった。

もう・また・まだ・ちょっと・少し・いま・まあ・なるほど・しばらく・どうも・やっぱり・なかなか・きっと・もっと・なにか・とにかく・やはり・いよいよ・まったく・やがて・あまり・どうして・いろいろ

漢語では、

いちばん・たいへん・だんだん・ちょうど・たくさん

が30回以上の高頻度の語であった。

特に「台本」ではオノマトペの多用が目立っている。「台本」は、ドラマの台本であるため、発話の部分とト書きの部分でオノマトペが盛んに使われていて、戦時中のオノマトペを知る上で興味深い。オノマトペ採録数の最も多い『日本語オノマトペ辞典』(小野正弘編2007)に採録されている語と対照させながら各資料の副詞の中からオノマトペを拾い出すと、異なり語にして、「家」では68語、「台本」で208語、計275語の戦時中のオノマトペが採集できた。この275語のオノマトペは、同辞典にすべて記載されている。戦時中のもので、現在に伝わらない語は1語もなかったのである。なお、同辞典では漢語由来のものも多く取り入れているので、本稿のオノマトペ採集にも「殷々・凜々」など漢語由来の語を含めている。この種の語彙は角田(2007)では「擬似オノマトペ」とされるものである。

「1万語」の中の副詞の中に含まれるオノマトペは89語で、それらと、「家」・「台本」中のオノマトペと共通するものは以下の54語である。

あっさり・いきいき・うっかり・うろろうろ・がっかり・がちり・きちん
と・ぎっしり・きつと・きっぱり・くつきり・ぐつと・煌々と・こっそり・さっさと・さつと・さっぱり・しっかり・じっくり・じつと・しみじみ・すっかり・すつきり・すつと・ずらり・そっくり・そつと・そろそろ・たつぷり・ちゃんと・つくづく・てつきり・転々・点々・とうとう・堂々・ときどき・どつと・どんどん・にこにこ・にっこり・のんびり・はっきり・ぱったり・はらはら・ぴかぴか・びっしょり・ぴったり・ひょつと・ぶつぶつ・ふらふら・ぶらぶら・ほつと・ぼつぼつ・ぼんやり・まごまご・ゆっくり

これらの語が、現代語の代表的なオノマトペということになる。

この中の漢語由来のものは以下の5語である。

煌々・だんだん・点々・転々・堂々

1万語には含まれていない、つまり「家」・「台本」から「1万語」にも共通

する語を除いた176語が戦時中のオノマトペの特徴的な語ということになるが、それらの中には漢語由来のものが多く含まれる。

殷々・燦々・赫々・^{かつ}曼々・肅々・続々・頻々・翩翩・黙々・悠々・嚙
唳・凜々・烈々・朗朗・轟々・蕭条・諄々・閃々・遅々・爛々・虎視
眈々

などである。

また、戦時中のオノマトペで使用頻度が5回以上であったのは

そろそろ・のんびり・がっかり・ぴったり・がたがた・そっと・はっ
と・さっぱり・がやがや・すっきり・はっきり・ゆっくり・しっかり

の13語で、この中には、漢語由来のものはみられない。異なり語数として、漢語由来の語は多いが、それぞれ頻度は低く、一般に多く使われるのは和語の4音節の語であることがわかる。

5-3 戦時中の語の使用語形

5-3-1 「タリ」活用の形容動詞

例11 餓鬼大将の猛も、一度教室へ入ると、忽ち颯爽たる面影は消えて、その存在すらなくなる。(「分教場」)

例12 各中隊のピストでは、隊員の整列した前で中隊長の指示が述べられ、早くもそれぞれの搭乗機へ勇姿颯爽と散って行く隊もある。(「前進基地」)

のような、「タリ」活用形容動詞の使用語形を調べる。「家」の「タリ」活用の語については遠藤(2007)でも述べているが²、以下では、「台本」の例を加えて検討する。

「タリ」活用の形容動詞が連体修飾の用法で用いられる際、古語では「颯爽たる」だが、現代語では、「颯爽たる 」「颯爽とした 」のふたつの語形が使われる。その使用の実際をみる。「-タル」の語形(以下「タル」形)と、「-と」「-とした」の語形(以下「ト形」と)の使われ型をまとめて表にする。これらの語の現代語との関係を知るために、最近の国語辞典

戦時中の日本語の実際

の情報を表中の辞書の欄に記入した。2のP41で述べているように『三現国』は〔文章語〕を区別しているので、その指示のある語にはそれを記入した。また、『三現国』に採録されていない語を「ナシ」とした。

〔表4 「タリ」活用語の使用語形〕

タリ活用形容動詞の使用語形																
	繕	外・家	タル・台本	タル・計	ト・家	ト・台本	ト・計			外・家	タル・台本	タル・計	ト・家	ト・台本	ト・計	
暗澹			0	0	0	0	1	1	整然		1	0	1	3	1	4
意気揚々			0	0	0	1	0	1	閃々	ナシ	0	0	0	0	1	1
殷々	文章語		0	0	0	3	0	3	端然		0	1	1	0	0	0
蜿蜒	ナシ		0	0	0	2	0	2	遅々	文章語	0	0	0	0	1	1
炎々			0	0	0	0	1	1	重畳	文章語	1	0	1	0	0	0
峨々	文章語		1	0	1	0	0	0	堂々		4	1	5	11	1	12
赫々	文章語		9	0	9	1	0	1	沛然	文章語	0	1	1	1	0	1
愕然			0	0	0	0	1	1	潑刺		2	0	2	3	0	3
敢然	ナシ		0	0	0	4	3	7	縹渺	文章語	2	0	2	0	0	0
毅然			0	0	0	1	0	1	広茫		1	0	1	0	0	0
翕然	ナシ		0	0	0	0	2	2	頽々	文章語	0	0	0	1	0	1
嚴然			1	0	1	3	0	3	憤然	文章語	0	0	0	0	1	1
煌々	文章語		0	1	1	0	0	0	翩翻		0	0	0	1	0	1
轟々			0	1	1	0	1	1	茫然		0	0	0	1	1	2
恍惚			0	0	0	0	1	1	脈々		0	0	0	0	1	1
轟然			1	0	1	1	0	1	猛然		0	0	0	1	0	1
広漠	文章語		2	0	2	0	1	1	黙々	文章語	0	0	0	5	1	6
荒涼			2	1	3	0	0	0	悠々		0	0	0	3	1	4
忽然			0	0	0	0	1	1	爛漫	文章語	0	1	1	1	0	1
混沌			1	1	2	0	1	1	爛々	文章語	0	0	0	0	2	2
颯爽			4	1	5	6	1	7	陸続	文章語	0	0	0	3	0	3
燦	文章語		6	1	7	4	0	4	嚶唳	文章語	3	0	3	2	0	2
燦々			1	0	1	1	0	1	凜然	文章語	0	0	0	1	0	1
燦然	文章語		1	0	1	3	0	3	凜々	文章語	0	0	0	0	1	1
肅々	文章語		0	0	0	1	0	1	凜冽	文章語	0	0	0	1	0	1
醇々			0	0	0	0	1	1	烈々	文章語	7	0	7	0	0	0
肅然	文章語		1	0	1	0	1	1	計		51	10	61	69	29	98
従容	文章語		0	0	0	0	1	1								

まず、資料によって大きく傾向が異なっている。すなわち、雑誌「家」と話し言葉の多い「台本」とで、タル活用の語の使用数も使用例数も異なり、「家」で、異なり語数20語・延べ語数51語採集されたのに対して、「台本」では、異なり語数・延べ語数とも10語で、「家」のほうが圧倒的に多い。

「家」で「タル」形で多く使われる語として、「赫々」9回、「烈々・燦」

各7回、「堂々・颯爽」各5回がみられたが、「台本」では各1回で複数の使用の語はない。また、「ト」形でも多く使われるのは、「堂々」11回、「颯爽」6回、「黙々」5回であるが、「台本」では「敢然」3回、「爛々・翕然」の各2回である。「堂々・颯爽」は「タル形」「ト形」とも多く使われているが、両語形の中では「ト」形のほうが多く使われている。「燦」は、「燦たる」のほうが「燦と」より多い。「烈々」は「タル」形のみで、「ト」形の使用例はない。このような「タル」形が中心になっている語が、現代語としては、一般的に使われにくい語で、言い換えれば、この種の語が戦時中の語の特徴を形成していることになる。

「タル」形と「ト」形両語形で使われる語の中で、その多少を、2以上の差があるもので示すと、次のようになる。

- タル形>ト形 : 赫々・燦・荒涼・縹渺
タル形 ト形 : 轟々・颯爽・肅然・潑刺・爛漫・嚙唳
タル形<ト形 : 殷々・蜿蜒・敢然・宛然・燦然・整然・堂々・黙々・
悠々・陸續・翕然

古語形である「タル」形が残っているし、「タル」形のみでの使用の語もあるが、全体的には、現代語形に近づいてきていることがわかる。このような過程を経て現代語形が確立してきたのである。

また、語自体としても使用されなくなっている語があり、『三現国』では、「蜿蜒・敢然・翕然・閃閃」は採録されていない。つまり、『三現国』では、これらの語は現代語とは認めていないのである。ただし、『広辞苑』にはいずれも採録されている。

2 「家」を対象とした「タリ」活用の形容動詞の使用の推移については『文学部紀要』21-1号でも論じているが、本稿では、「台本」も含めているので扱う語彙が異なる。

5-3-2「ナリ」活用形容動詞

「重大なる・偉大なる」のような、古語の「ナリ」活用の形容動詞は、その連体形は

例13 全国各府県の代表選手九十七名の盛大なる入場式。

(1942.2月)

のように、従来は「-なる」の形(以下「ナル」形)を取ったが、現代語では「盛大な入場式」のように連体形「な」の形(以下「ナ」形)で文言を修飾している。この種の「盛大ナル」か「盛大ナ」かを検討する。

「家」では、

新たなる・偉大なる・円満なる・大いなる×3・果敢なる×2・確実なる・強力なる・重大なる×2・聖なる・精鋭なる・盛大なる・切なる・壮絶なる・壮大なる・壮烈なる・卓抜なる・単なる・忠勇なる×2・熱誠なる・熱烈なる・遙かなる×3・微妙なる・暴慢なる・勇敢なる・有力なる

の33語が採集できた。「遙か」・「大い」のような、語幹が和語のものも混じっている。

「台本」では

偉大なる・宏大なる・旺なる・惨絶なる・執拗なる・重大なる×2・壮烈なる×3・単なる×2・忠勇なる・遙かなる・悲壮なる・有為なる・勇武なる・有望なる

の18語が採集できた。語幹はすべて漢語の形容動詞である。

「家」と「台本」を合わせると延べ語数で51、異なり語数で33であった。今回の資料で最も多く使われていた「ナリ」活用の形容動詞は「重大なる」「壮烈なる」「遙かなる」の3語で各4回使われていた。「重大」「遙か」は現代語でも使われるが、「壮烈」は、新聞の検索をしても使われることが少ない。

これらは、同時に現代語と同じ「-な」「-に」などの語形でも使われていて、現代語への過渡期にあることを示している。そこで、現代

語と同じである「-な」「-に・で・だ」の語形の使用状況もみることにする。33語について、戦時中記事の語形を調べた一覧表を示す。

(表5)

[表5「ナリ」活用語の使用語形]

ナリ活用形容動詞								
	辞書	ナル・家	ナル・台	ナル・計	ナ・家	ナ・台	な・家+台	ニ・デ・ダ
新た		1	0	1	1	0	1	13
偉大		1	1	2	2	3	5	1
円満		1	0	1	1	0	1	0
大い		3	0	3	0	0	0	15
果敢		2	0	2	9	1	10	0
确实		1	0	1	0	0	0	1
強力		1	0	1	5	0	5	0
広大・宏大		0	1	1	7	0	7	1
さかん・旺・盛ん		0	1	1	2	4	6	7
惨絶	ナシ	0	1	1	0	0	0	0
執拗		0	1	1	0	0	0	3
重大		2	2	4	4	3	7	1
聖	文章語	1	0	1	0	0	0	0
精鋭		1	0	1	2	0	2	0
盛大		1	0	1	5	1	6	7
切		1	0	1	0	0	0	1
壮絶		2	0	2	0	0	0	0
壮大		1	0	1	0	0	0	0
壮烈		1	3	4	2	1	3	0
卓抜		1	0	1	0	0	0	0
単		1	2	3	0	0	0	2
忠勇	ナシ	2	1	3	0	0	0	0
熱誠	文章語	1	0	1	0	0	0	0
熱烈		1	0	1	2	0	2	0
はるか・遙か		3	1	4	0	1	1	4
悲壮		0	1	1	1	1	2	1
微妙		1	0	1	2	0	2	0
暴慢	文章語	1	0	1	0	0	0	0
有為	文章語	0	1	1	0	0	0	0
勇敢		1	0	1	2	1	3	0
勇武	文章語	0	1	1	0	0	0	1
有望		0	1	1	0	0	0	2
有力		1	0	1	3	0	3	0
計		33	18	51	50	16	66	60

この表から以下のことがわかる。

1. 「家」での使用が「台本」での使用を大きく上回っている。「ナル」形で

約2倍、「ナ」形で約3倍である。

2. 「ナル」形で使われるのが多いのは、「重大」「壮烈」「遙か」の各4回、「大い」「単」「忠 勇」の各3回、「偉大」「果敢」「壮絶」の各2回である。頻度の多い語で、「ナ」形と「ナル」形の頻度を比べると、

偉大なる2：偉大な5 / 果敢なる2：果敢な10 / 宏大なる2：宏大・広大な7 / 旺んなる1：盛んな・さかんな6 / 重大なる4：重大な7 / 盛大なる1：盛大な6 / 壮烈なる4：壮烈な3

となつて、「壮烈」以外は「ナ」形が優勢である。「大い」「単」は「大いな」「単な」の語形がないので、「ナル」形しかない。

連用形をみると、「大いに」15回「新たに」12回「さかんに」「盛大に」が各7回使われている。「ニ」形は現代語も古語も同じ形である。つまり、このまま現代語に続いてきているといえる語形である。

「ナル」形のみが出現していて、「ナ」形の例がないのは、「確実・惨絶・執拗・聖・壮絶・壮大・卓抜・単・忠勇・熱誠・暴慢・有為・勇武・有望」の14語で、これらは、古語形容動詞の活用を維持している語群である。このうち、「確実・執拗・壮大・有望」などは現代でもよく使われる語であるが、今回の資料では「ナ」形の例は収集できなかった。表には5-3-1と同様、『三現国』に〔文章語〕の指示のある語はその旨表にも記入している。『集英社国語辞典 第3版』（以下）『集英』も《文章》と指示しているので、この辞書の記述にも触れていく。まず上記33語の辞書による有無を調べたところ、『広辞苑』には33語すべてが採録されているが、『三現国』には「惨絶・忠勇」の2語が、『集英』には「惨絶」が採録されていない。『三現国』・『集英』では「惨絶」は現代語ではないと判断されたのである。『三現国』・『集英』で文章語の指示のある語は、「聖・熱誠・暴慢・有為・勇武」の5語で、また、「卓抜」は『集英』では文章語とされている。これらの語に「ナ」形の使用がないということが現代語の日常語的ではないという判断の根拠になって文章語とされたのであろう。

文章語とされる語以外の語は現代語として一般の日常場面で使われる語

と判断されたと考えられる。「ナ」形の使用もある語「新た・偉大・円満・果敢・強力・広大・さかん・重大・精鋭・盛大・壮烈・熱烈・はるか・悲壮・微妙・勇敢・有望・有力」の18語は、『集英』『三現国』では、いずれも「文章語」の標示はなかった。現代語に近い位置にあるといえよう。

戦時中の「ナリ」活用の形容動詞が、「忠勇・惨絶」のように現代語辞書では採録されないもの、「熱誠・暴慢」など「文章語」と標示される、日常一般語ではない種類のもの、「有力・盛大」など現在でも一般に使われる語、と3つのグループがあることがわかる。「ナ」形で5回以上使われているのは「偉大・果敢・宏大・広大・重大・盛大・さかん」の6語である。

「ナル」形と「ナ」形の多少を語で示すと以下のようになる。

ナル形>ナ形 : 大い・単・忠勇・遙か

ナル形 ナ形 : 新た・円満・精鋭・壮烈・熱烈・悲壮・微妙

ナル形<ナ形 : 偉大・果敢・強力・宏・広大・さかん・執拗
盛大・勇敢・有力

これらの語のうち「単なる」「大いなる」は連体用法で「単な」「大いな」の語形がないので、「ナル」形のものしかない。「遙かなる」などは、現在では「遙かなる尾瀬」(写真)「遙かなる甲子園」(映画)「遙かなる時空の中で」(書名)「遙かなる屋気楼」(曲名)など、それぞれタイトル名としてしか使われない。一般の文章では「強力な・壮大な・さかんな」の「ナ」形で使われている。

戦時中の語彙の特徴として、形容動詞の古語の活用形「ナル」形がまだ多く使われていたことがわかる。

5-3-3 意味からみた形容語の分布

4-2の形容詞で見たと同じ方法で、形容動詞・副詞の意味上の分布を調べる。『分類語彙表』の分類項目に合わせながらみていく。先にも見たとおり形容動詞と副詞とは厳密に区別できないものが多いので、ここでは品詞分類にはこだわらず、形容動詞と副詞を合わせたものとして考察する。

「家」と「台本」から収集した形容語は722語である。

「家」と「台本」で使われていた形容動詞と副詞（以下「形+副」）の語群から「1万語」の中に含まれる「形+副」を差し引いた語群が戦時中の語の特徴を示していると考えられるので、「家」と「台本」の「形+副」から1万語の「形+副」を引いた数を出す。意味の分布を知るのが目的で、指示を示す語と、上記「擬似オノマトペ」以外のオノマトペはそれには該当しないと考えるので、ここでは省くことにする。

また、722語は、たまたま例外的に使われたということもありうるので、その偶然性を排除するために、2回以上使われていた語に限定する。

このようにして選んだ223語を『分類語彙表』の分類項目に合わせて、分類する。その意味記述に従ってその項目も書き込んでみる。この手順で1万語の中の形容語についても分類し、それぞれの語の分布を比べたのが、表6である。

〔表6 形容動詞+副詞の意味分類表〕

分類	1.16 3.16		1.17		3.10		3.11		3.12		3.13		3.14		3.15		3.19		3.30	
名称	時間		空間		真偽		類		存在		様相		力		作用		量		心	
出現度数	家・ 台本	1万	家・ 台本	1万	家・ 台本	1万	家・ 台本	1万	家・ 台本	1万	家・ 台本	1万	家・ 台本	1万	家・ 台本	1万	家・ 台本	1万	家・ 台本	1万
	29	29	1	2	6	4	10	1	3	3	15	7	6	0	7	4	42	34	43	9
比率(%)	13.4	30.5	0.4	2.1	2.7	4.2	4.5	1.1	1.3	3.2	6.7	7.3	2.7	0.0	3.1	4.2	18.4	35.4	19.3	9.5

分類	3.31		3.33		3.34		3.35		3.36		3.50		3.51		3.52		3.56		3.57		計		
名称	言語		生活		行動		交わり		待遇		自然		物質		天地		身体		生命				
出現度数	家・ 台本	1万																					
	2	1	6	0	25	0	1	0	7	0	13	0	3	0	2	0	0	0	1	2	0	223	95
比率(%)	0.9	1.1	2.7	0.0	11.2	0.0	0.4	0.0	3.1	0.0	5.8	0.0	1.3	0.0	0.9	0.0	0.0	0.0	1.1	0.9	0.7	99.9	100.1

この表から以下のことがわかる。

1. 「家」・「台本」で最も多いのは、分類項目で「心」と名付けられた項目の語彙である。「自ずと・無關心・悲壯・大儀・敬虔・ひたむき・健気・敢然と」などの語が含まれる。
2. 次に多いのは、「量」の項目で、この項目に属するのは「すこぶる・やや・まんざら・少しも・徹底的・無尽蔵・満々たる・広大・浩瀚・遅々たる・概ね」などの語である。
3. 「1万語」の形容語で多いのは「量」に属するもので「およそ・さほど・たいがい・単に・はなはだ・絶対に・思いっきり・できるだけ・一切」などの語が含まれる。
4. 次に多いのは「時間」の項目で、「ひとまず・改めて・たまに・近頃・とっくに・徐々に・あらかじめ・前もって・一挙に・いっせいに」などがふくまれる。
5. 「家」・「台本」の「形+副」が「1万語」のそれと比べて圧倒的に優勢なのは「行動」「自然」の項目で、そこに含まれるのは「果敢・頑強・豪胆・重厚・精鋭・壮絶・壮烈・達者・澆刺たる・卑屈・不屈・勇猛・磊落」などの語である。「自然」の項目の語としては、「殷々・燦々たる・高らか・爛々と・凜々」などの語が含まれる。光や音・色などが自然として分類されているのである。
このようにみていくと、「家」・「台本」で使われた語彙は、力を発揮して相手に向かっていく行動や、それに屈しない強さを意味する語群であることがわかる。光でも音でも「燦々と」光り輝き、「高らか」に鳴り響く、強い力を誇示し、力が賛美された社会の語であった。力と力が対峙し合う戦争中だからこそ飛び交った語群であったといえよう。このような語彙は、戦後の「1万語」には含まれていない。

6 戦時中を代表する語

6-1 戦争を表現する語

戦時中であるから、戦争に関する語は多く使われているが、それがどの

ような語であり、どのような数であるかを「台本」と「家」のコーパス検索によって調べてみる。ここでは、「戦」を含む語を検索してみる。

その結果、「家」では異なり語95語、延べ語数336語、「台本」で、異なり59語、延べ語数220語が検出された。「台本」と「家」を合わせた際の異なり語数は121語であった。

その大多数は漢語であるが、少数ながら和語も含まれていて、「戦う・戦い・いくさ・戦い抜く・戦い疲れる・負け戦」の6語の和語があった。

「戦」のつく語で最も多かったのが「戦場」の33回、次いで「戦争」31回、戦車」29回の順であった。10回以上出現した語は以下の16語であった。

海戦 合戦 決戦 作戦 戦艦 戦況 戦死 戦車 戦術 戦場
戦争 戦地 戦闘 戦闘機 戦友 戦う 長期戦

戦争での勝利を祈り、戦意を高揚するのが最優先の言語生活であったと考えられるが、中には「敗戦・負け戦・戦死」のような戦争遂行に水をさすような消極的な語彙も含まれている。「戦死者」が増えてきた実際を反映しているのであろうし、それを乗り越えるためには、あえて「戦死」も「戦死者」もその語を使わざるを得なかったのであろう。

これら「戦」を含む語の中には、実際の戦争に関する語だけではなく、「増産戦」「生活戦線」「神経戦術」など、生活の中で比喩的に使われるものも含まれている。そのことは、1944年に加茂正一が『新語の考察』で、当時の新語のひとつの型として、

いはゆる「国策の線に沿った」時局型といふべき、当面の時局を対照として時代の第一線に堂々と用ひられているもの。(pp1-2)
があると述べていることを裏付けている。戦争に関する語が蔓延してきて、それが一般語に入ってきたことを示している。

造語法からみると、 0+戦 00+戦、 戦+0 が主になっている。

0+戦： 応戦 海戦 開戦 合戦 観戦 休戦 苦戦 激戦 決戦 抗
戦 交戦 作戦 参戦 実戦 緒戦 聖戦 征戦 宣戦 挑戦
転戦 督戦 敗戦 奮戦 野戦 勇戦 陸戦 の26語

00+ 戦：科学戦 近代戦 空中戦 建設戦 航空戦 攻略戦 塹壕戦
陣地戦 前哨戦 殲滅戦 増産戦 掃討戦 争覇戦 総力戦
長期戦 肉弾戦 白兵戦 払暁戦 要塞戦 の19語

戦+0：戦役 戦果 戦火 戦艦 戦況 戦局 戦死 戦史 戦士 戦
時 戦車 戦地 戦術 戦勝 戦捷 戦傷 戦場 戦線 戦前
戦争 戦隊 戦闘 戦没 戦野 戦友 の25語

これらの語が、現代語の辞書にどう反映されているかを『三現国』で調べてみると、の「征戦・聖戦」は収録されていない、の語群は複合語なので収録されるのが少なく、「前哨戦・白兵戦」以外は採録されていない、

の語彙は、すべて採録されている、ということがわかった。なお、1943年に刊行された『明解国語辞典』（以下『明解』と略記）「には、の「要塞戦・空中戦」が採録されている。

ちなみに、「1万語」の「戦」のつく語は、「戦争・休戦・敗戦・戦争・戦闘・戦力・大戦」の7語である。

6-2 天皇に関する語

当時の社会は絶対天皇制下にあったから、天皇に関する語や表現も多く表れるが、その1例として「聖」のつく語を調べる。

「聖」のつく語は、以下の15語でそれぞれの出現頻度とともに示す。なお、現代では意味がわからなくなっている語もあるので、それらには(= ...)として注をつける。

「聖戦(= 神聖な目的のための戦争)」18回、「聖都(= 天子・国王のいる都)」5回、「聖寿(= 天子の年齢)」・「聖上(= 天子の尊称)」・「聖地」各4回、「聖代(= 聖天子の治める世)」・「聖業(= 天子の事業)」・「聖徳(= 天子の徳)」・「聖将(= 天子の率いる軍隊の将兵)」・「聖恩」・「聖旨」各2回、「聖画(= 天子の業績を描いた絵)」・「聖史」・「聖駕(= 天子ののりもの)」・「聖域」各1回

『三現国』には、このうち「聖地」「聖域」の2語しか採録されていない。

『広辞苑』では、「聖域・聖恩・聖戦・聖駕・聖業・聖旨・聖寿・聖上・聖代・聖地・聖徳」の11語が採録されているが、「聖史・聖画・聖将・聖都」の4語は採録されていない。

『広漢和辞典』では、「聖画・聖史・聖将・聖戦・聖地・聖都」が採録されていない。

当時発行された『明解』は、約1000ページの規模は小さい辞書だが、序で「時代とともに一般化した、軍事・政治・経済・運動〔……〕に関する専門語をも注意して採録した。〔……〕なかんずく大東亜戦争関係の新語彙についても、できるかぎり追加補訂したのである」(序(2))と述べているとおり、当時の社会に使われた語を積極的に採録している。「聖」のつく語についても、多く採録していて、『広辞苑』と全く同じ11語を採録している。

どの辞書にも採録されていない「聖都」など4語はみな「家」で使われているが、絶対的天皇制下での、さまざまな語に「聖」をつけて美化語を作った造語の例と考えられる。

なお、「1万語」の「聖」のつく語は「聖書」1語のみであった。

6-3 国に関する語

国を挙げて戦争していた時期であるから、国家意識は平時よりも高かったと思われるので、「国」のつく語のありようを調べた。

「国」のつく語は熟語に限らず、「お国のため」「わが国」など、当時盛んに使われた句も含めたが、「家」で異なり語で90語、延べ語数で617語、「台本」で異なり語数44語、延べ語数で129語採集できた。「家」と「台本」を合わせた異なり語数は101語であった。その中で出現頻度が高く10回以上のものは、

愛国 英国 お国のため 国 建国 皇国 国策 国防 国民 国民学校 国民政府 国家 国境 少国民 全国 祖国 中国 帝国 米国 満州国 靖国神社 我が国

の22語句であった。

使用頻度で最も多いのは「国民」の77回、次いで「全国」61回、3番目に「満州国」が続く。「家」で「満州国」が多数用いられているのは、当時「満州国」が作り上げられ、その「皇帝」が来日した記事がグラビアをかざり、また「満州」への開拓民と、その花嫁養成の記事がたびたび掲載されたからである。

これら「国」を含む語から、いくつかの当時の新語を見いだすことができる。

「国民学校」は、「1941年国民学校令により小学校を改めて成立した初等教育機関」(『広辞苑』p991)で、今回の「家」での初出は1942年3月号である。

例14 雪で名高い新潟県高田市大手町国民学校では、厳寒を勝ち抜く裸体体操に、決戦下日本のヨイコドモの保健と修練に多大の効果をあげてゐる。(1942.3)

台本では1942年に放送された「芦溝橋」に以下のように使われる。

例15 ちょうど、国民学校の五年生だという男の子といっしょになったんですよ。(「芦溝橋」)

「国防色」は、1940年刊行の『新訂版新聞語辞典』に以下のように記される。

こくぼうしょく(国防色) 陸軍軍服のカーキ色類似の色をいふ。
〔……〕支那事変以後は、警防団の団服、青年学校学生服ばかりでなく、一般に背広や学生服や児童服にも用ゐられている。(p171)

今回の資料では、

例16 国防色の制服もかひがひしい大陸の花嫁。(1942.9)
のように使われている。

次に「少国民」をみる。この語は『広辞苑』には、

しょうこくみん〔少国民〕(第二次大戦中の言葉)年少の国民の意で、少年少女のこと。p1376

と、第二次大戦中と限定されている。『戦中用語集』の「少国民」の項を要約すると、

1940年に、「児童文化協会設立準備会」ができたが、ここで使われた「児童」を「他の適当なもの」に変えることが要望された。それを受けて、1940年12月に発足した「日本少国民文化協会」がこの語の発端である。(p142)

ということになる。今回の資料では、

例17 入植当時は赤ん坊だった拓土の子供たちも、今では立派な少国民に成長した。(1942.3)

が初出である。

その他で、頻度の高い「国」のつく語をつなぎあわせると、「満州国」を「建国」し、「帝国」・「皇国」の軍隊が「国策」に基づき「国境」を越えて戦争し、戦死者を「靖国神社」に祀り、「国防」に専念した社会が浮かび上がってくる。

なお、これらの資料から採集された語のうち、「君国・神国・国引き・軍国・国都・国兵・国舞」の7語は、『三現国』には採録されていない。これらの語が、戦時中の語彙の特徴を形作っていることになる。

一方、「1万語」の「国」を含む語では「国 全国 天国 母国 国王 国語 国際 国産 国籍 国定 国土 国防 国民 国有 国立 国連 国家 国会 国境 国交」の20語が採集された。

まとめ

佐藤喜代治の言う、社会の中での「人間不在でない」言語研究に共鳴するものとして、社会がことばを作り、ことばが社会を動かすという前提に立って「昭和語」を研究したいと考えている。

戦時中の語彙は、力を鼓舞し積極的な行動を促す勇ましく強い意味を持つものが多くみられた。戦争遂行中の社会と呼応し合った、造語であり使用であったといえよう。

これと比較する意味で並べて検討した戦後の「1万語」には、「行動」「力」「自然」の項目が少なかった。すなわち、力で相手をなぎ倒す行動を進めることのない社会を反映したものであった。戦争のない戦後60年を経過した結果のことばの集積であったろう。戦争とことばとの関係については、社会や人間のさまざまな要因が絡み合って、言語が使われ生まれるのであって、本稿で考察したような語数の多少や、意味の分布で計られるような簡単単純なものではない。さらに精緻な考察のできる方法論を構築しなければいけないことを痛感している。

<引用した台本>

- 「五万円の旦那様」1940年2月6日 放送「五万円」と略記
- 「分教場の四季 分教場の冬」1941年11月12日 放送「分教場」と略記
- 「芦溝橋」1942年7月4日 放送
- 「前進基地」1942年10月23日 放送「前進」と略記
- 「御盾」1945年1月6日 放送

<参考資料・参考文献>

- 植原路郎編著（1946）『新聞雑誌語事典』八光社
- 遠藤織枝他著（2004）『戦時中の話しことば - ラジオドラマ台本から - 』ひつじ書房
- 遠藤織枝（2006a）「戦時中の敬語 - 家庭雑誌『家の光』のグラビアから - 」『文学部紀要』20-1号 文教大学文学部 pp1-23
- 遠藤織枝（2006b）「戦時中家庭雑誌の描く女性像」『ことば』27号現代日本語研究会 pp31-60
- 遠藤織枝（2007a）「戦時中の外来語は敵性語だったか - 戦時中の雑誌の用語調査から - 」北京大学日本語文化系 北京大学日本文化研究所編 『日本語文化研究 第7輯』学苑出版社 pp24-69
- 遠藤織枝（2007b）「戦時中家庭雑誌の用語の特徴 - 現代語への移行過程の例証として - 」文学部紀要21-1号 文教大学 pp151-169
- 加茂正一（1944）『新語の考察』三省堂
- 国際交流基金 日本国際教育支援協会、編著（2006）「1・2級語彙表」「3・4級語彙表」（『日本語能力試験 出題基準【改訂版】第3刷』凡人社 pp21-33, pp54-117
- 国立国語研究所編（2004）『分類語彙表 増補改訂版』大日本図書株式会社
- 佐藤喜代治（1975）「日本語の時代的変遷」『日本語の歴史 シンポジウム日本語』学生社 p73
- 柴田武（1975）同上p83

戦時中の日本語の実際

- 千葉亀雄編 栗田書店編集部新訂（1940）『新訂版新聞語辞典』栗田書店
角田賢一（2007）『日本語オノマトペ語彙における形態的・音韻的体系について』くろしお出版
三国一郎（1985）『戦中用語集』岩波書店
安田敏朗（2000）『近代日本語史再考』三元社
安田敏朗（2003）『脱「日本語」への視座 近代日本語史再考』三元社
安田敏朗（2006）『統合原理としての国語 近代日本語史再考』三元社
安田敏朗（2006）『「国語」の近代史 帝国日本と国語学者たち』中央公論社

< 参照辞書 >

- 市川孝主幹（2007）『三省堂現代新国語辞典 第3版』三省堂
小野正弘編（2007）『日本語オノマトペ辞典』小学館
北原保雄編（2002）『明鏡国語辞典』大修館書店
金田一京助編（1943）『明解国語辞典』三省堂 復刻版1997
新村出編（2008）『広辞苑 第6版』岩波書店
西尾実他編（2000）『岩波国語辞典 第6版』岩波書店
森岡健二他編（2000）『集英社国語辞典 第2版』集英社
諸橋轍次他編（1982）『廣漢和辞典』大修館書店
山口仲美編（2003）『暮らしの中の擬態語擬音語辞典』講談社
山田俊雄他編修（1978）『改訂新潮国語辞典 現代語古語』新潮社